鹿角市先人顕彰館

—内藤湖南の里を訪ねて—

石　立　弥　生　子

平成20（2008）年9月に、秋田県内の鹿角市先人顕彰館を訪問した。

東洋史学の泰斗といわれる内藤湖南（1866－1934）は、その晩年を約5万巻といわれる蔵書に囲まれ、京都の恭仁山荘で過ごしているが、鹿角市には内藤湖南の生家があり、湖南の功績をたたえる常設展示が先人顕彰館に設けられている。

関西大学には、創立100周年を記念して湖南の蔵書および遺愛品が寄贈された経緯があり、関西大学博物館では、それに関連して平成8年に「東洋史学の泰斗　内藤湖南」と題した企画展を開催した。また、この春に関西大学図書館でも特別企画展「内藤湖南—近代日本の知の巨匠—」が催され、不定期ではあるが湖南を顕彰する行事が行われている。かねてから湖南の生家を訪ね、先人顕彰館を見学したいと思っていたこともあり、青森県下の博物館・美術館見学もかね、思い切って十和田湖を経由して秋田県鹿角市までバスで遠征した。

内藤湖南の誕生地である鹿角市毛馬内は、秋田、津軽に境を接する要衝の地として、慶長12（1607）年に南部藩主利直公、直々の縄張りでもって城が築かれた城下町である。内藤湖南誕生地を示す石碑は、その武家屋敷通りに建立されている。その石碑の奥には、今でも内藤家ゆかりの方がお住まいという住居がある。



石碑から少し回りこんだところに、毛馬内領主（桜庭家）の筆頭家老の家に生まれ、十和田湖に鱒の養殖を成功させ、その生涯を十和田湖開発につくした和井内貞行（1858－1922）の生家があり、その跡が鹿角市先人顕彰館となっている。

青森からバスで南下したため、自然に囲まれた環境を十分堪能し、その印象が薄れないまま毛馬内に到着。実は、バス停を降りて方向感覚を失くして困っているところを、庭木を剪定中の方に先人顕彰館まで送ってもらった。

大阪から来たことを告げ、次のバスの発車時間まで僅かしかないことを話すと、内藤湖南ゆかりの場所をわざわざ車で案内してくれた。


鹿角市先人顕彰館（旧和井内邸）

土地のかたの人情にふれ、感激もひとしおであった。

先人顕彰館では、受付を通るとまずは湖南の帰郷の折に、地域の人々と夜を徹して語り合ったといわれている書院（復元）が目に入る。

恭仁山荘でも、湖南を訪ね教示を請う者が列をなしたといわれている。秋田師範学校を卒業し、学者としては無名であったにもかかわらず、書や漢詩文にも優れた才能を発揮し、京都帝国大学で東洋史学の第一人者として多数の後進に影響を与えた湖南との会話は、いかようなものであったのだろうか。



この書院は『論語』の子罕編からとられたと思われる「何陋（かろう）」という額が掲げられている。鹿角から世界を見つめた湖南の矜持がうかがいしれるようである。

館内には、湖南の品格高い端正温雅な書や、遺品、書簡のほか、和井内貞行の関連資料など、鹿角市に縁の深い先人の資料が多数収集・展示されている。

【鹿角市先人顕彰館】Tel：0186-35-5250
〒018-5334
秋田県鹿角市十和田毛馬内字柏崎3-2